

老ヒツピー記

檀一雄

檀一雄作品集⑨

老ヒツピー記



浪曼

檀一雄作品集第九卷

老ヒッピー記

昭和49年7月25日 初版発行

定 価 1200 円

検印廃止

著 者 檀 一雄

発行者 西川謙浩

発行所 株式会社 浪 曼

東京都港区白金台3丁目14番 LBビル

電話 東京 (03) 445-8641 (代)

振替 東京178054番 ㊦ 108

印刷所 株式会社チューエツ

製本所 中村製本株式会社

乱丁落丁の本はおとりかえいたします。

© 1974 Printed in Japan

0393-740039-9226

目次

老ヒツピー記 5

人と旅 117

保田與重郎と五味康祐…………… 119

音 問…………… 125

サムとアントニオ…………… 129

棟方志功の世界…………… 134

三島由紀夫…………… 141

圖案童子・横尾忠則…………… 144

唐十郎・異端の道へ…………… 148

肉体の風華者・土方巽…………… 153

子守歌…………… 157

グリークの町…………… 161

月とスツボン 167

解題 278

老 ヒ ッ ピ ー 記

オールド
老
ヒ
ッ
ピ
ー
記

モロッコに「マラッケシ」と云う町がある。

むかしの王城があった立派な町で、人口は、さあ、二十七八万といったところだろう。

いや、諸君が「モロッコ」「モロッコ」と云っているのは、おそらく英語読みの地名であって、ほかならぬこの「マラッケシ」がイギリス風に「モロッコ」と訛^{なま}って発音されるようになったからだ。

また、たとえば、フランス語の「マロク」ポルトガル語の「マロッコシユ」さては、ドイツ語の「マロッコ」など、みんな、その「マラッケシ」がそれぞれの国の言葉の流儀に従って発音されたものに違いないが、今ではその「マラッケシ」を「モロッコ」の「マラッケシ」と云わなくては、話が通じない。

「モロッコ」と「マラッケシ」が国の名と、町の名に、別れてしまったからだ。

そんなことはどうでもいい。

この「マラッケシ」のメジナ（アラブ旧市街）の中心に「フナの広場」と云う痛快な広場がある。

朝のうちは、広場に朝の市が立っているが、午後になると、見世物競演広場である。

やれ、蛇使いだ。やれ、軽ワザだ。やれ、自転車曲乗りだ。やれ、曲芸だ。やれ、ダンスだ。やれ、剣舞だ、等々……。思い思いに広場の一部分を占領して、思い思いの見世物をやっている。

なにしろ、町のと真ん中の大広場だから、人はゾロゾロと歩いている。

モロッコには、アテなしの、或は用なしの、いやいや、仕事なしの、人間がゴマンといふから、彼

らは、アテなしに、ぼんやりと、その人垣に加わって、見世物の周囲を、とりかこんでいるわけだ。格別、その見世物を見ていると云う感じではない。

ただ、ぼんやりとつつ立っていて、後ろから人ごみに押されれば前によるけ、前から押しかえされれば後ろによるける、と云った具合である。まったく、それだけだ。

はじめから金を払う筈はないから、

「どいた！　どいた！」

と云われれば、どく。

見世物の方が、また、その人垣をうわ回るような空漠さなのである。私も一日中、ぼんやりとその人垣に押されたり、押しかえされたりして立っていたから、よく知っているが、例えば、蛇使いだ。

コブラ（目鏡蛇）が三四尾、地面にひろげられた薄ぎたない毛布の上にいるだろう。蛇使いのジジイが、自分の腰のあたりの着物をつまみあげながら、チョンチョンと体をゆすぶり、コブラをからかうと、コブラが鎌首をもたげて、突っかかってくる。するとジジイは、おどけて逃げる真似をして、まわりの笛、太鼓がそれをはやす、と云うだけだ。

まったく、それだけだ。日がな一日、それだけである。

すると、誰が一体、金を払うか、と云うことになるだろう。アテなしの、用なしの、仕事なしの、人垣の人間どもは、誰も払うものなんかいやしない。

たまたま、そこを通りかかった外国の観光客があって、手にしたカメラの習慣から、反射的に、パチリとやる。

さあ、すかさず、集金係が駆けつける。

いくら、おこったって、たしかに撮したことは撮したんだ。三デルハムだ。二デルハムだ。いや、一デルハムだ、とこぎることは出来るだろうが、どうしたって、取られるものは取られる。

そこで、また笛太鼓がはやし、蛇使いのジジイは、日がな一日、チョンチョンと腰をふりつづけると云うわけだ。

アラブの町をうろつくのには、アラブ人の恰好が一番いいと思ったから、私は「フナの広場」のまわりの店で、帽子と外套がいのうを見て回ったのだが、

「これは、いくらだ?」

こっちが訊く前に、

“How much?”

と売手の方がつめよってくるんだから、おそれ入った。つまり、

「いくらで買ってくれるんですよ?」

とこちらの最終の出し値を訊くわけだ。

先ずまあ、十分の一ぐらいに切り出して、五分の一ぐらいの値段に落ち着くようである。

アラブ帽を二百円、オーバーを千五百円見当で買った。そのオーバーにポケットがないから、金入れ用に頭陀袋ずだごうを買った足したのが、五六百円だったろう。私はすぐに着用して、ようやく、アラブの迷路に迷いこんだような安堵を感じたものだ。

まったく、メジナの迷路を、人に揉まれ、驢馬ろばに揉まれて歩くほど愉快なことではない。

狭い道路はほしいままにこっちに曲り、あっちに曲り、一たん迷いこんだら、人波に押されながら、自然とその波の方向に従って歩いてゆくよりほかにはないのである。

自分の知慧で出発点に引きかえそうなどと、そんなサカシラははじめから無駄だ。

バレーク（どいた）

バレーク（どいた）

と馬方が大きな荷物をのつけた驢馬を、狭い道の人ごみの真ん中に、ひきずり込んでゐるから、その荷物になぎ倒されそうになる人。驢馬の尻に抱きつく人。まったく、そのさわがしさ、やかましきは、氣違い沙汰である。

その癖、アテもなく、用もないのに、そのさわがしさ、やかましさの中に、揉まれ、流されつづけていないと、自分が消滅してしまうような心細い氣持になるから、つくづく、不思議である。

アラブの町の迷路は歴史とか時間とかをとろかしつくした、抽象の人間の流れに思われて、切ないほどの空漠が感じられたものだ。

「フナの広場」から間近いところに、「クトピア」のモスク（回教寺院）の尖塔がそそり立っていて、その下が小庭園になつてゐるから、石の上に腰をおろしながら、ぼんやりと落日を眺めやっていたら、「ハッシッシは要らないか？」

「ハッシッシを安く分けるよ」

一人のアラブ青年が寄つてきて、私の耳に囁いた。

そう云えば、「マラッケシ」はヒッピーの聖地と聞いている。

いや、町の中ですれちがう、外人の青年男女諸君の、ほとんどが、ヒッピーに思われたものだ。生え放題の髭。上半身が裸であったり、アラブの古着であったり。首から、頭陀袋をかけていた。足はハダシが多い。

私は靴こそ履いているが、アラブ帽に、アラブの上ッ張りだ。首から頭陀袋をかけている。

アテもなく、用もなく、主として、自分から逃れ出したい為ばかりのように歩きつめているだけである。

心の類似までうんぬんされたくないが、しかし大まかにヒッピーと見たてられたって、不思議でも、何でもないだろう。

大きく人種の類別をこころみるなら、ひょっとしたら、老ヒッピーの族かも知れぬ。

私はそのアラブ青年から、ハッシッシこそ買わなかったが、落日と、空いっぱい夕焼を眺め終ったあとも、空漠の想いにかられるままに、クートビアの尖塔が、ようやく夜の照明に白く浮き出しになるまで、その場を動けなかった。

「フナの広場」は、夜になると、蛇使いも、曲芸師も、剣舞も、見世物という見世物はみんな、どこかに消えていってしまつて、屋台の、露店の、にわか食堂が、アセチレンランプや、蠟燭ろうそくをともしながら、カバブ（肉の串焼）だの、ケフタ（肉団子）だの、さまさまのタジン（煮込み料理）だのを、売りはじめるのである。

一串五円だとか、一皿二十円だとか、ベラ棒に安い御馳走がズラリと並んで、さかんな湯気をあげている。

私は、その屋台店を一軒一軒のぞきまわっていたが、どうやら一張りのテント食堂の中に、正真正銘のヒッピー男女諸君が群れているのを見たたん、思い切りよく、彼らの中に割り込んでいった。

二

坂口安吾とか、太宰治とかのことを、よく、無頼派という名で呼ばれる。時には、また破滅型と云う人間型に所属でもしていたらしく、破滅型作家坂口安吾とか、破滅型作家太宰治だとか、形容されることがあって、彼らが無頼派といわれ、破滅型と呼ばれても、アソウカ、と私は大して意にも介しないが、時々、この私まで、彼らの巻添えをでも喰うのか、「無頼派ノ最後ノ生残り」だとか、「最後ノ破滅型」だとか云われると、

「よろしい。では、やがて、諸君は九十歳の破滅型作家と云うのを見るだろう」

などと、からかってみたくなる。

安吾や、太宰が、ほんとうに、その無頼派だか、破滅型だか、私はくわしくは知らないけれども、世界のあちこちで時々すれ違ったり、喋ったり、偶然、一緒にメシを食ったりするヒッピー達と……、氣質の一点だけを云うならば、随分と似通ったところがある。

と云うより、安吾や、太宰の氣質を、現代人の中から拾ってみるとするならば、ヒッピーの族と、一番似ているかも知れぬ、とフツとそう思うことがある、と云ってみたいだけだ。

これは、あちこちですれちがったヒッピーに対する私の感傷であって、ヒッピーの哲学とか、ヒッピーの生活とか、を詳細に調査した上の話ではない。

云ってみれば、あちこちでヒッピーとすれ違った際の、その含羞（大宰の好きな言葉だ）と云うか、氣立のやさしさ、と云うか、脱落者の悲しさ、と云うか、それとも、虚飾に対する離脱とでも云うか、権勢に対する抵抗とでも云うか、が、安吾や太宰などの、氣質と、きわめて類似のものであるように感じられたと云うだけの話である。

ヒッピーには麻薬の常用者が多く、手に入る限り、その夢幻を愛好するようだが、誰でも知っている通り、安吾も太宰もまた、麻薬の常用者であった。

ヒッピーは、なるべく市民社会には迷惑を及ぼさないように、息をつめて暮しているようなところがある。（もつとも、これがヒッピーの生活哲学全般であるか、どうか、私は知らない）

昨年の春であったが、私の家の軒先に、三四人のヒッピーが起居するのを目撃した。

私の家と云ったが、ポルトガルの家である。ポルトガルのサンタ・クルス浜の家の話だ。

そのヒッピーの話を書く為には、ちょっとばかり、サンタ・クルス浜の部落の模様を説明しなくては、わかりにくいだろう。

サンタ・クルス浜は、夏場は海水浴客で大にぎわいを呈する避暑地である。戸数は、さあ、くわしく調べたこともないが、千戸も立っているだろうか。

夏のバカンスの頃は、それらの家と云う家が全部ふさがり、いや、その納屋、あそこの小屋と、みんな避暑の家族が殺到し、夏だけ開くホテルが合せて五六軒、超満員になり、俄人口は、ひょっとしたら、二万人を超えるかもわからない。

郵便局を例にとってみれば、冬だと、フランスへ出稼ぎに行っている亭主待ちの女郵便局長一人だ

けが、暇と体をもてあましながら、日がな一日、編物をやっていると言うのに、それが夏になると、三人ずつの局員が二交替になり、それでも天手古舞の大忙し、と云うことになる。

いや、夏になると、映画館が開き、フアード（ポルトガルの民謡）小屋が生まれ、ダンス場が急造され、魚と野菜の市場が開設され、ニューヨーク（？）曲馬団が乗り込んでくるといったような有様だ。そのバカンス客も、ポルトガル人はもとより、フランス人、ドイツ人、オランダ人、デンマーク人、ノルウェー人、スウェーデン人、と多彩だが、一流避暑客ではない。一流は、ニスとかカンヌとかへ行くだろうし、二流は、ポルトガルでも、カスカイシュとか、エストリールとか、アルガルブなどに行ってしまうだろうから、三流……、いや、五流、どころの避暑客が押しよせてくるのである。

しかし、その浜辺は、世界第一級だと云っておこう。

五六キロにわたるまっ白い長汀（ながとう）がつながっているのである。

それよりも、昨日までは、どのドン百姓かと云いたくなるような近郷近在のオバさんや野良娘達が、一たん、そのボロ着を脱ぎ棄てて、裸になり、海に立ち向かうと、「ああ、なんて美しい……」堂々海に対比して、生きて亡んでゆく、見事な女体として眺め直されるから不思議である。

分厚い胸。ひろがる乳房。要所要所をくくり絞ったようなその足と腰。正直な話、私は、彼女らの足許に膝まずきたくなるような衝動に駆られたことが、何度もあった。

彼女らは、格別、泳ぎはしない。彼女らが泳ぐにとしては、大西洋の水は少し冷えすぎるようだ。彼女らは、大抵、押しよせてくる波に、二三度ブチノメされて、浜辺の太陽を存分に浴び、メロンを囓（か）ったり、西瓜を食べたり、やがて、断崖から流れ落ちてくる寛（か）の水を浴びながら、体を洗い流して、